

熊倉修先生のご退職にあたって

経済学研究科委員長 橋 本 泰 明

熊倉先生は真珠湾攻撃の前年、都内でお生まれになり、疎開先での戦中の食料不足や空襲の記憶をお持ちのこと。私とは学年で3年の違いしかなく、幸か不幸か、私にはこれらの記憶は全くありませんが、敗戦後の人生の修正軌道については、私は熊倉先生に遠く及びません。熊倉先生は都内の名門高校を卒業された後、国立（くにたち）にある有名国立大学・大学院で「経済発展論」「数量経済史」を中心にして研究を続けられ、博士課程を修了されました。

その後著名な電力関係の研究所で、20年近く調査・研究活動をされました。この間、電源立地が漁村に及ぼす経済的影響、紙・パルプ産業のエネルギー需要の計量分析、世界のエネルギー需給と価格動向についての計量分析、タイやインドネシアの経済発展にともなうエネルギー需給の分析、アジア諸国のエネルギー需給にかかわる環境問題に関する成果を公表され、さらにはフランスの電力事情の研究成果をいくつか公表されました。

1990年に公募人事の難関を突破され、亜細亜大学の教授に就任されました。本学では「経済発展論」を中心に、「アジア経済論」「アジアの経済制度と日系企業」「フィールドのアジア」「工業経済論」「ヨーロッパ産業発展論」「フランス経済論」と幅広く科目を担当され、大学院でも「工業経済論」を中心に担当されました。

いつも笑みを絶やさない穏やかなお人柄で、信頼感厚く、本学に着任してからわずか5年で学部長に選任され、さらに2003年から、再び学部長として登場されました。この頃は「旧教養部」の先生方の分属が実施された直後の変革期でもありましたが、学部長時代は極めて公正・公平な運営を実施され、教授会は活発な議論のもとに変革期を乗り切ることができました。2005年には3期目に入りましたが、体調を崩されたこともあり、途中で辞任されたのは誠に残念なことでありました。

本学に來られてからは、タイとフランスの電力事情に関する研究成果を公刊されています。先進国の中では、フランスは日本とともに一貫して、原子力発電を継続・促進している国として知られており、地球温暖化にともなう近年の環境問題の深刻化や、新興国の経済成長にともなうエネルギー問題の深刻化から、再度注目を浴びている国々です。そしてこれらの研究成果を土台にして、2009年に『フランスの経済発展と公企業——フランス電力公社の成長と構造変化』（芦書房）を出版されました。400ページを超えるタイムリーな大著で、公益事業学会の学会賞を受けられました。

本年1月、熊倉先生の「経済発展論」の最終講義に出させていただきました。通常の講義の延長線上にある最終回で、授業は淡々と、かつ理路整然と進められました。発展途上国における温暖化対策がテーマで、原子力発電所を建設中のタイを事例にして、懇切丁寧に説明されていました。「タイは旧通商産業省の依頼で派遣されて以来、穏やかな国民性が気に入った」とのこと。穏やか

なお人柄はタイの国民性と共通するところがあるのではないかと勝手に想像しています。まさにそのような穏やかな雰囲気の中で授業は進められ、締めくくられたのでした。私もこのような雰囲気の中で授業をしなければいけないと大いに反省したことでした。

既に書きましたが、大学の変革期に学部長として4年半、経済学部を発展させ、近年は教務委員長、さらには副学長として大学の看板となって活躍されると同時に、研究の総まとめとして大著を出版するという業績を残されました。このような多方面にわたる最近のエネルギッシュな御活躍は、加齢症を複数抱えた私としても、大変羨ましく、敬服の他はありません。これを「柳のような強さ」と表現された方もおられます。一時崩された体調もすっかり回復され、御自身の「エネルギー問題」は全く存在しないようにお見受けします。今後ともお元気にお過ごしください。